

編 集 後 記

本年は、8月30日に行われた第45回衆議院議員総選挙で与野党が逆転し、1955年以降ごくわずかな期間を除き続いてきた単一党中心の政権が終焉するという、わが国の大きな転換点ともなる年になりました。山積する医療を巡る諸問題に関して、少しでも解決への糸口が見いだされる転機となるよう期待したいものです。

さて、今月号には、原著1編、症例報告14編が掲載されています。研究報告においては、独創性が非常に重要で採否の判断において最も重視されるポイントの一つです。そのため、“他とは少し異なる”実験などでポジティブな結果を得た研究は相対的に高い評価を得やすく、世界中で膨大な数の論文が出版されることとなります。欧米の一流といわれる雑誌に掲載された論文すべての価値が真に高いと言えるのか、疑問に思わざるをえないこともあります。本号の原著論文は「食道手術における結腸再建術に対する血管吻合付加の有用性」について検討したもので、既に広く普及した手技であり、独創性を発揮しづらい研究テーマです。しかし、普通に行っている手術であっても、それを新たな視点から、かつ科学的に分析し考察すれば、価値ある研究課題になりうることを示しています。

研究成果や臨床経験は、医学・医療に携わる者の共通の財産として、明確な記録として残すことにより初めて普遍性を有すようになります。体験の積み重ねによる個人的な技術の向上はもちろん重要ですが、医療の社会性を考慮した場合、医師には他者の経験を合理的に取り入れ活用する姿勢が求められます。ヒトという他に替えがたい存在を対象とする医療においては、貴重な個人の体験を個人のレベルに終わらせてはいけないということでもあります。

本誌の編集委員会は、報告された論文に独創性や稀少性、新知見などが少しでもあるかぎり、貴重な研究成果や症例が科学的な記録として残るよう、また、投稿された論文の質が更に向上するよう大きな努力を払っています。多くの論文はよく推敲され投稿規定に沿っていますが、形式が極めて不適切な論文もまれに見られます。再投稿に際しての編集委員会指摘の問題点、疑問点への回答も多くは適切になされていますが、不適切な場合もあります。それらは、論文の価値を著しく傷つけることにもなり兼ねません。論文を世に問うための最後の努力と労を惜みず、本誌へエビデンスを残していただきたいと思います。

(河野辰幸)